総合医学会報告

シンポジウム

# 摂食・嚥下・栄養障害
# −病院から在宅へ−

座長　河崎寛孝†

第67回国立病院総合医学会
（平成25年11月９日　於金沢）

IRYO　Vol. 68　No. 11（541－543）2014

**要旨**　「在宅医療・介護元年」も２年目となり，在宅ケアの充実・システム化が，国・自治体によって，全国で，急速かつ積極的に進められている．

在宅での療養生活を開始，継続していくためには，まず栄養状態の安定がその基盤であり，栄養は食事摂取の能力と深く関係しているので，摂食障害・嚥下障害・栄養障害は在宅療養の大きな阻害因子となっている．よって，この摂食・嚥下・栄養へのアプローチは，来たるべき超高齢化社会に向けての急務であり，たいへん重要な課題である．ところが，この栄養摂取に関わる領域は，認知機能，心理状態，顔面・舌・咽頭・上肢・体幹の運動麻痺と筋力低下と感覚障害，義歯，歯周症，胃食道逆流，頸椎疾患，慢性肺疾患，食習慣，食事環境など，多くの専門科と多職種が関与する領域であり，エビデンスも不十分で，十分な治療を行うことがなかなか難しい…という状態がこれまで長い間続いてきた．

しかし，近年，急性期の病院を中心に，栄養サポートチーム（NST）の普及と，言語聴覚士による嚥下訓練が一般化してくる中で，在院日数という制限はあるものの，摂食・嚥下・栄養障害に対しても一定の成果をあげることが可能となってきた．

今後は，この入院治療におけるアウトカムをいかに在宅ケアにうまくつなげていくかということが課題となってくる．

当企画では，シンポジストの先生方から，急性期病院および在宅における摂食・嚥下・栄養障害の現状と問題点，そしてそのアプローチの方法，また，病院から在宅への連携に向けた新しい取り組みをご紹介いただいた．

これから未来に向けて，この課題に対してわれわれはどのように進めて行けばよいのか，今回のシンポジウムで検討することができた．

キーワード　嚥下リハビリテーション，栄養サポートチーム，多職種連携，在宅医療

金沢脳神経外科病院　リハビリテーション科　†医師
別刷請求先：河崎寛孝　金沢脳神経外科病院　リハビリテーション科　〒921−8842　石川県野々市市郷町262−２
e−mail : ikari@po.incl.ne.jp
（平成26年３月７日受付，平成26年６月20日受理）
Dysphagia and Nutrition Disorders：Hospital and Home Care Cooperation
Hirotaka Kawasaki，Kanazawa Neurosurgery Hospital
（Received Mar. 7, 2014, Accepted Jun. 20, 2014）
**Key Words** : dysphagia rehabilitation，nutrition support team，cooperation，home health care